小学校

平成12年度

教育研究員研究報告書

道　徳

東京都教育委員会

平成12年度

教育研究員名簿

第1分科会

地区名	学校名	氏名
新宿	四谷第四	原田知樹
葛飾	中青戸	栄和徳
板橋	舟渡	小澤佳絵
立川	第四	□井上正義
日野	仲田	鈴木裕子
練馬	開進第一	○石川腎治

第2分科会

地区名	学校名	氏名
墨田	第二寺島	赤堀美嗣
大田	大森第五	○山本由紀子
板橋	三園	山崎高志
江戸川	上小岩第二	□立野豊
八王子	第四	山田研二
国分寺	第九	前山きみえ

第3分科会

地区名	学校名	氏名
大田	池上第二	□笠井清美
杉並	高井戸第四	横山太加男
武蔵村山	第十	小林玲子
あきる野	増戸	須崎ちえみ
世田谷	三宿	◎宮本洋

第4分科会

地区名	学校名	氏名
台東	浅草	○土肥喜代美
墨田	柳島	渡辺功
江東	大島南	勝又正之
品川	八潮	伊藤均
府中	第六	井出寿雄
多摩	大松台	□町田千恵美

◎全体世話人　○分科会世話人　□分科会副世話人

担当　東京都立多摩教育研究所指導主事　長谷川　一　彦

研究主題　　未来を拓く道徳授業の創造

目　　次

◇　研究主題について…… 2
◇　研究の概要 …… 3

Ⅰ　集団や社会の中で生きることに喜びを感じ、よりよくわかろうとする心を育てる指導の工夫 …… 4
1　分科会テーマ設定の理由
2　文献研究・実態調査
3　研究構想図・指導の工夫
4　実践事例・考察

Ⅱ　自己を見つめ、前向きに生きようとする心を育てる指導の工夫…… 9
1　分科会テーマ設定の理由
2　児童の実態調査・分析
3　研究構想図・指導の工夫
4　実践事例・考察

Ⅲ　体験をもとに生きていることを自覚できる指導の工夫 …… 14
1　分科会テーマ設定の理由
2　実態調査・分析と考察
3　研究構想図・指導の工夫
4　実践事例・考察

Ⅳ　互いのよさや違いを認め、すすんで人とかかわる心を育てる指導の工夫 …… 19
1　分科会テーマ設定の理由
2　実態調査・分析
3　研究構想図・指導の工夫
4　実践事例・考察

◇　研究の成果と今後の課題 …… 24

研究主題設定の理由

未来を拓く道徳授業の創造

◇研究主題について

私たちは、夢や希望をもって、この世紀を生きようとしている。子どもたちには、主体的に様々な課題に立ち向かい、解決し、よりよい社会を共に築く人間に成長し、この世紀を担ってほしいと願っている。しかし、克服し明日へつなぐべき課題は多い。

戦後わが国は、物の豊かさを追求しすぎ、心の豊かさがなおざりにされてきた。また、社会構造の変化は、地域の教育力の低下、少子化等の社会問題を招いている。そのため、人間としての在り方の根本となる普遍的な道徳性は、機能しにくい状況になった。このような大人の道徳性は、子どもたちに反映し、影響を与えている。

子どもたちの現状は、さまざまな体験が不足し、人とのかかわりも少なくなっている。そのため、自己中心性が増し、豊かな感情や理性・判断力が低下し、人の痛みがわからない想像力に乏しい子どもが目立ってきている。このような子どもたちには、実感を伴った知識、よりよい生き方を求める道徳的実践力の育成が必要となる。

学校では、様々な問題が表面化し、戦後の教育自体が問われている。これからは、社会の変化に主体的に対応するとともに、国際社会において自らの役割と責任を果たすことができる日本人を育てることにより、未来につながる教育を行うことが求められている。また、子どもたちが主体的に活動できる様々な体験・かかわり合いを通して、共に生きようとする豊かな人間性を育てることが大切である。これらは、学校教育全体で行われるべきことであり、各教科・特別活動等を通じ、道徳教育として価値を明らかにすることが基盤となる。そして、「道徳の時間」を要として、培われた価値観を補充・深化・統合する必要がある。

この道徳授業を今まで以上に子どもの実態に即し、一人一人の体験をもとにかかわり合いを生かし、自己を見つめ、子ども同士、子どもと教師が相互に作用できるものとしなければならない。子どもたちが、常に前向きな姿勢で夢と希望をもち、明るくたくましく未来を生きていこうとする心を育む授業にしていかなければならない。さらに、子どもたちが、主体的にこの心をもち続けようとすることにより、未来は切り拓かれるものと考える。

この確信をもって、本研究主題『**未来を拓く道徳授業の創造**』を設定した。以下のように分科会ごとの主題を設定し、創り出された道徳授業も「未来を拓く」ものであると考え、研究主題に迫ることとした。

第１分科会　集団や社会の中で生きることに喜びを感じ、よりよくかかわろうとする心を育てる指導の工夫

第２分科会　自己を見つめ、前向きに生きようとする心を育てる指導の工夫

第３分科会　体験をもとに生きていることを自覚できる指導の工夫

第４分科会　互いのよさや違いを認め、すすんで人とかかわる心を育てる指導の工夫

◇研究の概要

研究主題　未来を拓く道徳の創造

第１分科会	第２分科会	第３分科会	第４分科会
目指す児童像			
集団や社会に対して愛情や愛着をもち、自信をもってかかわろうとする子ども	夢や希望をもち、よりよい自分を創造して生きようとする子ども	自らの存在や生き方を見つめ、生きることのすばらしさを自覚し、力強く生きようとする子ども	互いのよさや違いを認め合いすすんでかかわる子ども
分科会主題			
集団や社会の中で生きることに喜びを感じ、よりよくかかわろうとする心を育てる指導の工夫　（４の視点）	自己を見つめ、前向きに生きようとする心を育てる指導の工夫　（１の視点）	体験をもとに生きていることを自覚できる指導の工夫　（３の視点）	互いのよさや違いを認め、すすんで人とかかわる心を育てる指導の工夫　（２の視点）
仮説			
①集団や社会に対する自分のかかわり方を道徳の時間に深く見つめる活動を通して、子どもの心を揺さぶる。 ②全教育活動の中で集団や社会とかかわる体験を重視する。 上記のことを行えば研究主題に迫ることができる。	子どもたちの心を揺さぶり、明るい未来を思い描けるような資料の工夫をし、効果的に活用することによって、自己を見つめ、よりよい自分創り、よりよい未来創りに向けて実践意欲を育てることができる。	児童が体験を生かし生命について様々な角度から捉え、考えを深められる指導の工夫をすれば、生きていることを自覚できる。	互いのよさや違いを認め合える指導を工夫すれば、他者を肯定的に捉え積極的に人とかかわることができる。 よさや違いを互いに認め合うようになると他の人を肯定的に捉えるようになる。これを繰り返すことで、人とかかわることが楽しくできる。
指導の工夫			
◎集団や社会の中での体験を生かした道徳の時間を工夫する ○心に響くように発問や資料活用を工夫する ○自他の考え方を尊重した話し合いの活動を工夫する	◎資料選びと資料の開発の工夫 ○興味・関心を高めるための資料提示の工夫 ○道徳的価値の主体的な自覚を促す学習過程・授業展開・発問の工夫	◎体験を生かす指導の工夫 ○生命をさまざまな角度から捉えられる指導の工夫 ○指導過程の工夫	◎多様な価値観を引き出す資料の選択 ○多様な意見、互いのよさや違いを引き出せる発問の工夫 ○発達段階に即したねらいの焦点化 ○自他の考えを認め合い深められる話し合いの工夫 ○ワークシートの活用と工夫 ○効果的なＴＴの活用と工夫

検証授業

総合的な評価（指導計画・指導方法・児童の変容）

Ⅰ　集団や社会の中で生きることに喜びを感じ、よりよくかかわろうとする心を育てる指導の工夫

1．分科会テーマ設定の理由

少子化・核家族化が進む現代においては、連帯感の希薄化や個々人の孤立化などが背景として考えられる問題が多く起きている。また、人間関係を重荷に感じ、心の痛みを抱える若者が話題とされることも多く、集団や社会の中での生きづらさを感じている人が増えているといわれている。この人たちは、果たして生きることに喜びを感じている状態にあるといえるのであろうか。

こうした問題を解決していくためには、集団や社会における人間関係の中で、「自分」「相手」「お互い」を深く心に感じ合わせながら、ありのままの自分が「かけがえのない大切な存在」であることの実感、つまり、自己肯定感をはぐくんでいくことが何よりも大切であると考える。

子どもたちは、「集団や社会の中に生きている自分」を自覚し、集団や社会に真剣に向き合いかかわろうとするとき、様々な体験を肯定感に自らに取り入れることができるだろう。そして、そのかかわりを通して「世界にただ一人の大切な自分」や「相手もまた、世界に一人の大切な存在」であることを実感することができるものと考える。子どもたちは、こうした自己肯定感をもつことで大切な自分や相手が所属する集団や社会に対して、より愛情や愛着をもち、自信をもってかかわろうとするだろう。このとき、子どもたちは生きることに喜びを感じるに違いない。

そこで、本分科会では、研究主題として「集団や社会の中で生きることに喜びを感じ、よりよくかかわろうとする心を育てる指導の工夫」を掲げ、研究を進めていくこととした。

2．文献研究・実態調査

(1)　文献研究

子どもが、自己肯定感をどのくらい抱いているのかということを文献により研究した。

（ベネッセ教育研究所が、世界４都市の小学校５年生【合計3,446名】を対象に、選択肢法による質問紙調査を行ったものを参考　モノグラフ小学生ナウVol1、13－2）

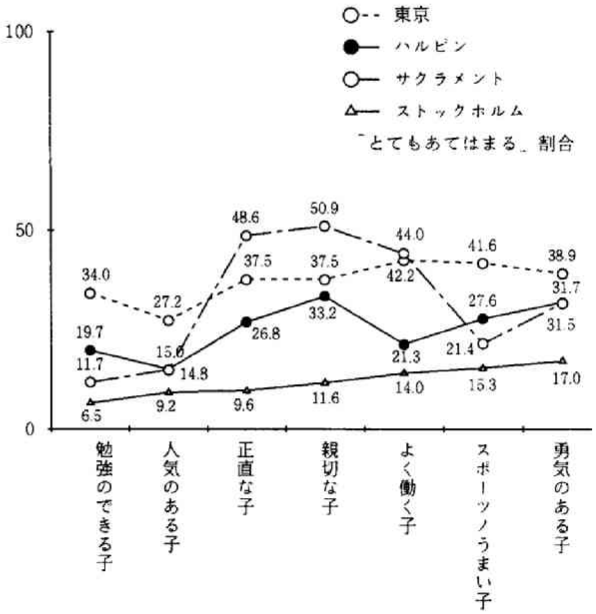
◎　結果と考察（抜粋）

設問１　あなたは、どんな子ですか。

※　下記の７項目について、とてもあてはまる・わりとあてはまる・あまりあてはまらない・ぜんぜんあてはまらないのうち、どれか１つを選択した。

① 勉のできる子　② 人気のある子
③ 正直な子　④ 親切な子
⑤ よく働く子　⑥ スポーツのうまい子
⑦ 勇気のある子

※　右記は、そのうち、「とてもあてはまる」を選んだ子どもの割合をグラフにしたものである。



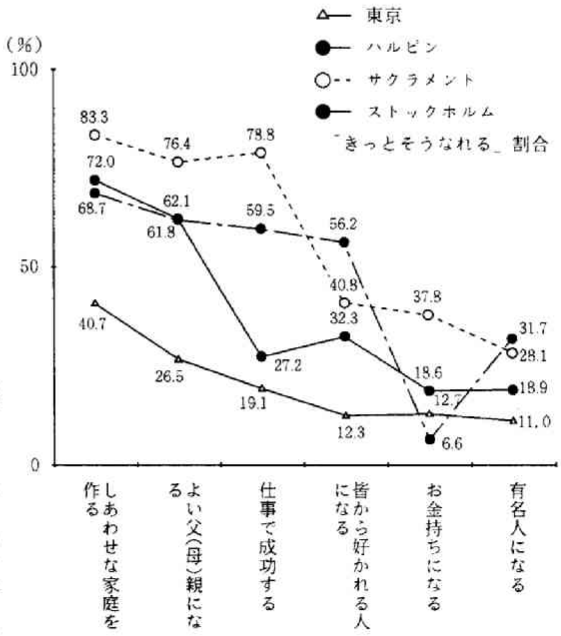
このように東京の子どもは、他の都市の子どもに比べて自己評価がきわめて低い。これは、謙遜や控え目という言葉で解釈することもできるであろうが、昨今の子どもたちの実態を考えると、自信を失っている状態と捉えた方が自然である。

設問２　あなたは、自分がどんな大人になれそうだと思いますか。

※　下記の６項目について、きっとそうなれる・たぶんそうなれる・あまりそうなれない・ぜったいそうなれないのうち、どれか１つを選択した。

① 幸せな家庭を作る　② よい父(母)親になれる　③ 仕事で成功する　④ 皆から好かれる人になる　⑤ お金持ちになる　⑥ 有名人になる

※　右記は、そのうち、「きっとそうなれる」を選んだ子どもの割合をグラフにしたものである。



このように、将来への見通しにおいても、東京の子どもは、他の国の子どもと比べて未来を暗いものと感じていることが分かる。「自分の将来は、自分で切り開いていく」という前向きな気持ちを抱いていないのである。

以上、２つのグラフが示すとおり、東京の子どもは、自分自身に対してマイナスの考えやイメージを、傾向としてもっていることが分かる。私たちは、この事実をもとに子どもの将来を、自信をもって集団や社会とかかわりながら生きていって欲しいと願い、研究を進めていくこととした。

私たちは、子どもが自分自身に対してもつイメージは概ねつかむことができた。しかし、分科会研究主題やねらいとする価値に迫るためには、「集団や社会」に対して子どもたちはどの程度関心をもっているのかを明らかにする必要性を感じた。そこで、以下のアンケート調査を行った。

(2)　**実態調査**　都内公立小学校６校１、４、５、６年　計180名

・　あなたは、どんなときに（　　）を「好きだな」と思いますか。
・　あなたは、どんなときに（　　）の中で「役に立っている」と思われますか。
※　カッコ内には、家族・クラス・学校・自分のまち・国を入れて、それぞれについて、子どもたち一人一人に口答調査・質問紙調査をした。

◎　**結果と考察**

・　子どもたちの集団や社会に対する認識は次のとおりであった。

低学年→家族、学級　　中学年→家族、学級、学年　　高学年→家族、学級、学年、学校

※　低→中→高と広がりはあるが、こちらが考えているほどには、集団や社会に対しての認識はもてていなかった。

・現在、子どもたちが認識している集団や社会でのかかわりを深め、さらに広い集団や社会とのかかわりに目を向けさせていくことが必要である。

3．研究構想図・指導の工夫

教科・領域	学年	主として集団とのかかわりに関する価値項目
国語		
（書写）	中高	愛国心
（楽しい家族）	低	家族愛
生活		
（町探検）	低	郷土愛
社会		
（町探検）	中	郷土愛
（昔調べ）	中	郷土愛
（世界の中の日本）	高	愛国心
家庭		
（家族の役割）	高	家族愛
総合的な学習の時間	低	郷土愛
（高齢者との交流）	中	郷土愛
	高	郷土愛、社会奉仕
特別活動		
（遠足）	低	規則の尊重
	中高	規則の尊重、公徳心
（縦割り班活動）	低	愛校心
	中	愛校心、公徳心
	高	愛校心、公徳心、役割責任自覚
（クリーン運動）	低中高	勤労、役割自覚、郷土愛、公徳心
（運動会）	低	愛校心、郷土愛
	中	愛校心、郷土愛
	高	愛校心、郷土愛、役割自覚
（ユセフ募金）	高	国際理解、親善
（移動教室）	中高	規則尊重、公徳心、愛校心 役割責任自覚、愛国心
（委員会活動）	高	役割自覚、協力
（クラブ活動）	中高	愛国心、役割自覚、協力

－全教育活動における集団や社会の中での体験－

(1) 集団や社会の中での体験を生かした道徳の時間を工夫する。

◎ 全教育活動

○ 各教科・領域（左記の表参照）

○ その他の時間

◎ 日常体験

○ ボランティア活動　○ 地域活動

○ 家族との交流　○ 習い事

など

※ 子どもたちが、上記のようなさまざまな場面で体験したことを、授業中に想起したとき「体験を生かした」として捉える。

(2) 心に響くように発問や資料活用を工夫する。

【発問の工夫】

○ 子どもの実態調査を踏まえた上で発問を考える。

・ 悩みや心の揺れ、葛藤を自分自身の問題として捉えることができる発問

・ 登場人物の気持ちに自分の思いを重ねながら深く考えることができる発問

【資料活用の工夫】

○ 子どもの実態調査を踏まえた上で実態に寄り添った資料を選ぶ。

・ 副読本　・ 自作資料　・ 物語、伝記、エッセイ、新聞（タイムリーな内容）など

・ テレビ番組、ビデオ作品　・ 子どもたちの日記

・ 紙芝居、実物、写真、図表、ペープサート　・ ビデオ、ＯＨＰなどの視聴覚機器

(3) 自他の考えを尊重した話し合いの活動を工夫する。

【自他の考えを尊重】

○ 自分の考えをまとめるために、時間を十分に確保する。

○ 自分の考えを明確にするために、ワークシートを活用する。

○ 自他の考えのよさや違いに気づき、認め合えるようにするために意見交換を取り入れる。

・ 劇化、動作化、役割演技　・ ワークシート

【話し合いの活動の工夫】

○ 小グループや討議形式による話し合いをする。

・ バズセッション　・ パネルディスカッション　・ ディベート

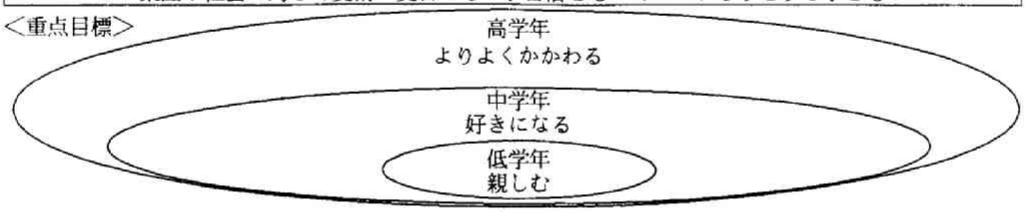
研究構想図

第１分科会テーマ

集団や社会の中で生きることに喜びを感じ、よりよくかかわろうとする心を育てる指導の工夫

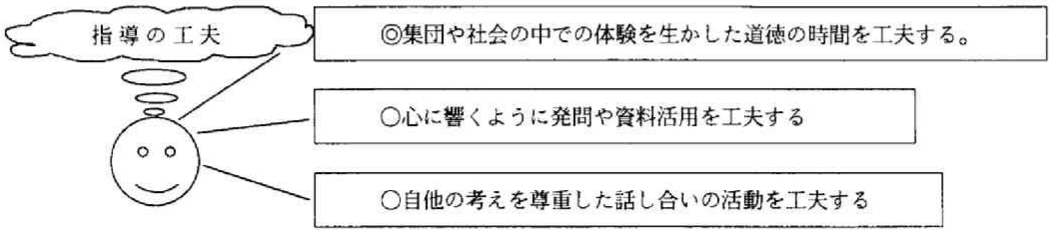
☺ 目指す子ども像 ☺

集団や社会に対して愛情や愛着をもち、自信をもってかかわろうとする子ども



研　究　仮　説

☆　集団や社会に対する自分のかかわり方を道徳の時間に深く見つめる活動を通して子どもの心をゆさぶる。
☆　全教育活動の中で集団や社会とかかわる体験を重視する。
上記のことを行えば研究主題にせまることができる。



４．実践事例・考察

(1)　主題名　みんなで気もちよく　（低学年　４－①　規則尊重）

資料名　「きこえなかった　おはなし」（Ｇ社　１年）

(2)　ねらい

・　約束やきまりの大切さを知り、人に迷惑をかけないで、みんなで気持ちよく生活していこうとする心情を育てる。

(3)　分科会研究主題との関連

①　集団や社会の中での体験を生かした道徳の時間を工夫する。

◎　体験を想起できる資料選択

子どもたちが、普段から身近に体験していることを扱った資料を選ぶことにより、子どもが体験を踏まえた価値の追求をすることができるようにする。

②　心に響くように発問や資料活用を工夫する。

◎　映像による資料提示

コンピュータを使って資料を子どもたちに提示することにより、意欲を喚起する。

◎　自分の気持ちを色で表すワークシート

字を書くことが容易ではない１年生にとって、色で自分の気持ちを表現することで、発問に対しての自分の気持ちを素直に表現することができる。

③　自他の考えを尊重した話し合いの活動を工夫する。

◎　話し合い活動を活発にする役割演技

□　役割演技をしたり、見たりすることで、実感を伴って友達の考えを受け入れたり、自分の考えを述べたりすることができる。

(4) 展開

	学習活動	主な発問と児童の反応	支援
導入	1．約束が守られていない写真を見る。	○ この写真を見て、どんな気持ちがしましたか。 ・どこだろう。 ・あっ、いやな気もちがする。 ・捨ててはいけないんだよ。	◇ 「きもちよく」「きまり」について、子どもたちが想起しやすくするために、捨てられた空き缶の写真を提示する。
展開前段	2．資料「きこえなかったおはなし」を聞いて、「わたし」の気持ちについて話し合う。	① 先生のお話を聞いているとき、「わたし」はどんなことを考えていたでしょう。 ・ 楽しい話だな。 ・ 先が知りたいな。 ② 廊下がうるさくて、お話が聞こえなくなったとき、「わたし」はどんな気持ちがしたでしょう。 ・ 静かにしてよ。 ・ 邪魔しないで。 ・ 人のいやがることはしてはいけないんだよ。 ③ 「あっ」と、昨日のことを思い出したとき、「わたし」はどんなことを考えたでしょう。 ・ 昨日、自分がいやな思いをしたんだから、静かにしよう。 ・ うるさくしたら、他の人に迷惑をかけてしまう。 ④ 「わたし」が、苦手な跳び箱をとっても楽しくできたのは、なぜでしょう。 ・ 先生に誉められたから。 ・ きちんとできたから。 ・ 気分がいいから。 ・ 廊下を静かに歩くことができて、うれしかったから。	◇ 資料の内容を充分に理解できるようにするために、紙芝居（コンピュータで提示）を使う。 ◇ 「わたし」の気持ちについて考えやすくするために、発問毎に紙芝居を黒板に提示する。 ◇ 登場人物の気持ちを切実に捉えることができるように、②・③の発問では、代表者による役割演技を取り入れる。また、それを見ている子どもたちには、インタビューをする。 ◇ 「わたし」の気持ちを想起しやすくするために、ワークシート（色鉛筆で、そのときのわたしの気持ちを表すであろう色を考えて塗る。）を取り入れる。
後段	3．普段の生活について考える。	○ みなさんが、頑張って守っているきまりには、どんなものがありますか。 ・ 給食の用意をする時間は、しゃべらない。 ・ 校庭では、ボールを蹴ってはいけない。 ・ ランプ坂は、通ってはいけない。	◇ 普段からかかわりのあるきまりについて思い浮かべることで、きまりについての意識を高める。 ◇ ねらいとする価値に迫ることができるよう、きまりを守れたときには気持ちがいいんだということに結びつける。
終末	4．今日の授業を振り返る。	・今日の授業楽しかったね。 ・元気よく歌おう。 ・みんなできまりを守れたらいいね。	◇ クラスの歌を全員で歌うことで、実践への意欲を高める。

(5) 考察

- 資料の内容が子どもの実生活と結びついているものだったので、自分の体験を思い起こして考えることができる。
- コンピュータ映像による資料提示は、子どもの興味を喚起し有効であった。
- 自分の生活について振り返る場面では、「どんな気持ちできまりを守っているのか」という発問の方が、心情を育てるというねらいより迫ることができたのではないか。

Ⅱ　自己を見つめ、前向きに生きようとする心を育てる指導の工夫（第２分科会）

１　分科会テーマ設定の理由

消費型社会、情報化社会と言われる現在、人々は生活の利便性を追求し、物質的にはとても豊かになった。生活様式が一変したのと同時に、時代の大きな変化も加わり、これまでの伝統的な価値観にも疑問がもたれるようになってきた。次第に、人としてよりよく生きるために大切にはぐくまなければならない価値観までもが揺らぎ始め、危うくなってきている。今や様々な価値観が交錯し、混沌とするようになってきた。このような状態では、子どもたちがよりよく生きることのイメージをもつことや、生きていく上でより望ましい価値を選ぶことは非常に困難である。有害な情報に振り回される子ども、享楽主義に陥る子ども等々の例も極端な話しではなくなってきている。

しかし、健全な未来社会にとって、どんなに時代が変わろうと、人間の本質にかかわる道徳性は不変であろう。とりわけ、人間が常に前向きな姿勢で未来に夢や希望をもち、主体的に行動することは、人間としての生き方の根本にかかわるものであり、今こそ学校教育においても重要視しなければならないところであると考える。

そこで第２分科会では、児童があるがままの自分を見つめて、自分のもっているよさを知り、さらに伸ばしていこうとしたり、これからの課題に気付き、克服していこうとしたり、夢や希望をもって自分の可能性を信じ、よりよい自分を創造していこうとしたりすることの動機づけとなるような授業を展開することが、「未来を拓く道徳授業の創造」につながると考え、分科会主題を「自己を見つめ、前向きに生きようとする心を育てる指導の工夫」と設定した。

＜本分科会における言葉の概念＞

- **自己を見つめ・・・**よりよい生き方を求め心、自分のよさ、弱さ、弱さを克服する内的な力、可能性に気付くことをいう。
- **前向き・・・・・・**夢や希望を持って失敗をおそれずにチャレンジする姿勢をいる。

２　児童の実態調査・分析

(1)　調査目的

子どもたちが日常生活の中で、どのようなところから心を揺さぶられたり、考え方などの影響を受けたりするのか、その実態を把握する。

(2)　調査方法

平成12年７月、都内６校の第２学年から第６学年の児童870名を対象とし、一部自由記述を含む選択肢法による質問紙調査を行った。内容は全学年共通とした。

(3)　調査内容・考察（太字は質問項目）

①　感動したお話をどこから聞くことが多いですか。

子どもたちに影響のある情報源は、映画・ビデオ・テレビ番組等であった。

②　尊敬する人（「すごいなあ！えらいなあ！」）と思う人はいますか。

児童にとって尊敬する対象は友達・親・スポーツ選手など日常生活で目にする範囲内での答えが多かった。

③　自分のよいところはどんなところだと思いますか。

低学年は得意なことや誉められたことなど、表面に現れやすいことを自分のよいところとして挙げる傾向があったのに対し、高学年では自分自身の性格のことなど、内面的な特徴を

挙げる傾向にあった。また、約30%の児童が自分自身のよいところを挙げることができなかった。

④　自分を変えたいところはありますか？

約70%の児童が、変えたいところがあると答えている。変えたいところがない児童のほとんどは現在の自分自身に満足しているという回答であった。

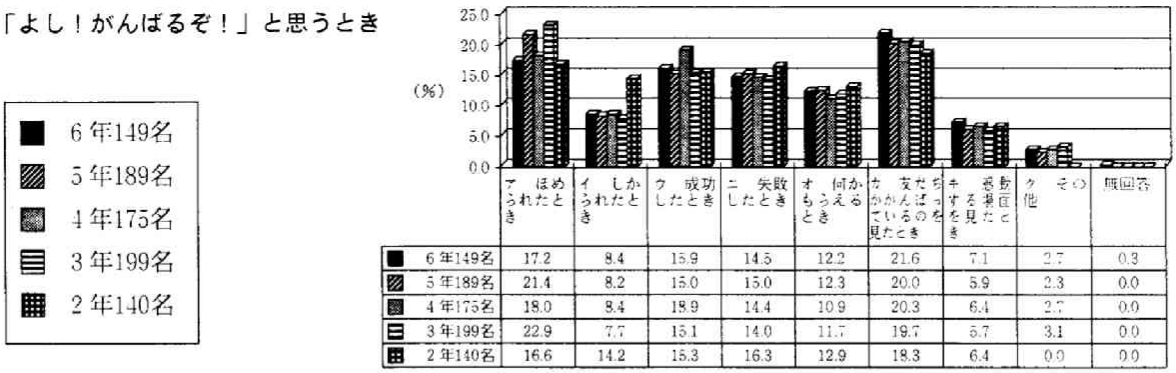
⑤　どういう時に、「よし、がんばるぞ！」と思いますか。

子どもたちがどのようなときにやる気を出すか知るために質問をした。

イ「しかられたとき」より、ア「ほめられたとき」の方が、2年生をのぞいて多く、否定的な評価より肯定的な評価の方が子どもたちのやる気を生み出させることが分かる。

しかし、ウ「成功したとき」とエ「失敗したとき」を比べてみると両者の差はなく、子どもたちは、成功体験からだけではなく失敗体験からも「がんばろう」という気持ちを同じように感じていることがうかがえる。この調査結果から、失敗にくじけず、それをバネにして頑張る姿勢を大切にした資料を取り上げていくことも、子どもたちの生きる力をはぐくむ上で重要であることが分かる。さらに、カ「友達が頑張っているのを見たとき」が多く、子どもたちにとって身近な存在である友達の影響がかなり大きいことが分かる。したがって、取り上げる資料も、子どもたちにとって身近に感じさせるものが有効であることが、この調査結果からも知ることができた。

「よし！がんばるぞ！」と思うとき



	ア　ほめられたとき	イ　しかられたとき	ウ　成功したとき	エ　失敗したとき	オ　何かもらえるとき	カ　友だちがかんばっているのを見たとき	キ　感動する場面を見たとき	ク　その他	無回答
6年149名	17.2	8.4	15.9	14.5	12.2	21.6	7.1	2.7	0.3
5年189名	21.4	8.2	15.0	15.0	12.3	20.0	5.9	2.3	0.0
4年175名	18.0	8.4	18.9	14.4	10.9	20.3	6.4	2.7	0.0
3年199名	22.9	7.7	15.1	14.0	11.7	19.7	5.7	3.1	0.0
2年140名	16.6	14.2	15.3	16.3	12.9	18.3	6.4	0.0	0.0

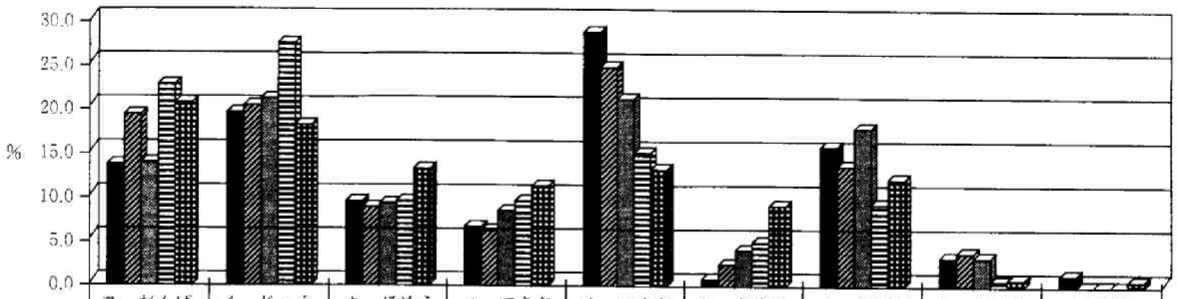
⑥「よし、がんばるぞ！」と思ったことを、途中であきらめずに頑張り続けられたのは、なぜですか。

子どもたちがねばり強くやり通した経験は、どういう要因で継続されるのか知るために質問した。

この調査結果を見ると、ウ「ほめられたから」、エ「できないとはずかしい」、カ「やめるとしかられるから」という外的要因よりも、ア「頑張っていると気持ちいいから」、イ「じょうずになるから」、オ「できないとくやしいから」というような子どもたちの心の中の内的要因によるところの方が大きく、子どもたち自身、よくなりたい、できるようになりたいという気持ちを強くもっていることを知ることができる。また低学年は、カの「やめるとしかられるから」や、エ「できないとはずかしい」のように高学年に比べて外的要因の割合が高く、高学年は、オ「できないとくやしいから」のように内的要因の割合が高い傾向にある。

道徳の授業を通して、子どもたちのこの内なる気持ちをさらに高めていくことは、たくましく生きていく力をはぐくむ上で大切なことが分かる。

あきらめずに続けられた理由



	ア　がんばっていると気持ちいい	イ　じょうずになるから	ウ　ほめられたから	エ　できないとはずかしいから	オ　できないとくやしいから	カ　やめるとしかられるから	キ　はげまされたから	ク　その他	無回答
6年149名	13.8	19.7	9.6	6.7	28.9	0.8	15.9	3.3	1.3
5年189名	19.1	20.5	9.0	6.3	24.9	2.5	13.7	3.8	0.0
4年175名	14.0	21.3	9.4	8.6	21.3	4.1	18.0	3.3	0.0
3年199名	22.9	27.6	9.7	9.7	15.2	5.0	9.4	0.6	0.0
2年143名	20.8	18.3	13.3	11.4	13.3	9.2	12.2	0.8	0.6

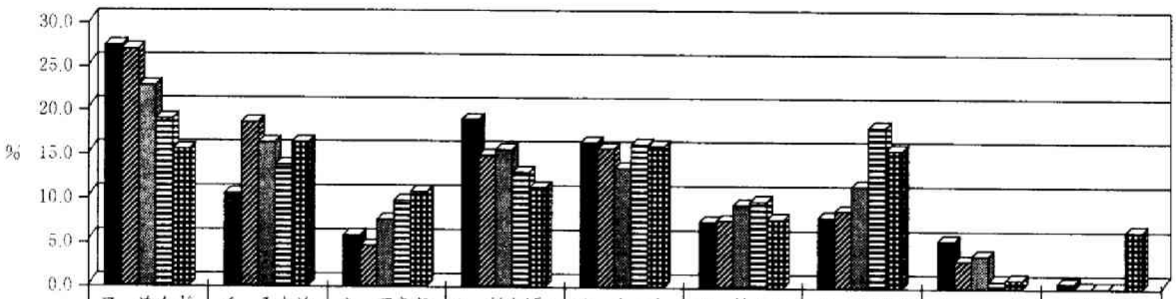
項目

⑦「よし、がんばるぞ！」と思ったことを、どういう時に途中でやめてしまいますか。

子どもたちがねばり強くやり通せなかったのは、どういうことが阻害要因になっているのか知るために質問した。

学年が低い場合、ウ「できないところを知られるのが恥ずかしいから」や、キ「失敗するのがいやだから」のように、経験不足からくる自信のなさによる要因が高いのに対して、学年が高くなると、ア「面倒くさくなったから」や、エ「頑張っても目標が達成されそうにないから」のように、今までの経験から判断した自信のなさによる要因が高くなっていることが分かる。この調査結果から、学年が低い場合には、失敗をおそれず目標に向かって挑戦していくことの大切さを取り上げた資料、学年が高くなるにつれて、あきらめずに努力していくことの大切さを取り上げた資料が児童の実態により有効に働くことが分かる。

頑張るぞと決めたことをあきらめた理由



	ア　めんどうくさくなったから	イ　みとめてもらえなかったから	ウ　できないところを知られる	エ　がんばっても目的が達成されそうにない	オ　もっと楽しいことを見つけた	カ　忙しいから	キ　失敗することが嫌だから	ク　その他	無回答
6年149名	27.4	10.5	5.8	18.9	16.3	7.4	7.9	5.3	0.5
5年189名	27.0	18.6	4.6	14.8	15.6	7.6	8.7	3.0	0.0
4年175名	22.8	16.2	7.6	15.5	13.4	9.3	11.4	3.8	0.0
3年199名	19.0	13.7	9.7	12.9	16.1	9.7	18.1	0.8	0.0
2年128名	15.5	16.3	10.7	11.2	15.9	7.7	15.5	0.9	6.4

項目

以上のようなアンケートの結果の分析に基づいて、児童の実態を捉え、次のページのような研究構想で取り組んだ。

3　研究構想図・指導の工夫

（目指す児童像）

夢や希望をもち、よりよい自分を創造して生きようとする子ども

- 自分のよさに気付く子
- 自分の目標がもてる子
- たくましく生きる子

（分科会主題）

自己を見つめ、前向きに生きようとする心を育てる指導の工夫

（仮　　説）

子どもたちの心を揺さぶり、明るい未来を思い描かせるような資料の工夫をし、効果的に活用することによって、自己を見つめ、よりよい自分創り、よりよい未来創りに向けての実践意欲を育てることができる。

「心を揺さぶる」

- 今まで思っていた価値観と違う価値観に出合うことによって問い直しができる。
- 普段の生活の中では感じられないような崇高な価値観に出合う。
- 気付かなかった価値観に気付く。

「明るい未来を思い描ける」

- 自分の可能性を自覚できる。
- 自分もやってみようという意欲がもてる。（チャレンジ精神）

（指導の工夫）

資料選び・開発の工夫	資料提示の工夫	授業展開・発問の工夫
○ 現実感のある資料 ○ 話しの流れがわかりやすい資料 ○ 発達段階に応じた資料 ○ 苦労を乗り越えた体験を含んだ資料 ○ 児童の実態を考慮した資料 ○ 崇高な価値観に出会わせる資料 素材例 ・テレビ番組、新聞、インターネット ・書籍（ルポ、自伝、絵本など） ・インタビュー ・児童観察	○ 親しみをもたせる ○ 驚き・意外性をもたせる ○ 疑問をもたせる ○ 現実感をもたせる ○ 理解を促す 資料の形態例 ・映像　・具体物 ・紙芝居　・ゲストティーチャー ・場面絵 ・実演	○ 感想を大切にした展開・発問 展開例 ・個々の感動を小グループで話し合い、違った視点に気付き合う展開 ○ 話の筋を押さえた展開・発問 展開例 ・資料を切り、心情の変化などを順に追っていく展開 ○ 総合との関連を考えた展開・発問

4　実践事例（第３学年）

(1)　主題名　「夢や希望に向かって努力」中学年１－(3)粘り強くやり遂げる

資料名　「ジム・アボット少年の挑戦」（自作資料）

(2)　ねらい　自分でやろうと決めたことは、困難に負けず、粘り強く努力して、挑戦していこうとする気持ちを育てる。

(3)　分科会テーマとの関連

資料選択－実在の人物の少年時代の話を中心に開発し、児童に親近感をもたせる。

資料展開－場面ごとに資料を区切って発問をし、話しの展開に引き付け、主人公の心情を考えさせる。

(4)　展　開

	学　習　活　動	主な発問と予想させる児童の反応	指導上の留意点
導入	1．資料の主人公を知る。	○アボット選手の少年時代と大リーグ時代の写真を見て、何か気が付くことがありませんか。	・本時の資料に関心を持たせる。
展開（前段）	1．資料「アボット少年のちょうせん」を聞き、場面ごとに主人公の気持ちを考える。	**①泣きながら家に帰るジム少年は、どんなことを思ったでしょう。** ・くやしい。・やっぱり右手のせいかな。 ・みんなと野球がやりたいな。 **②ジム少年は、どんなことを考えながら、技の練習をしていたのでしょうか。** ・苦しいなあ。・やめてしまおうかな。 ・みんなとぜひやりたい。 ・苦しいけどがんばろう。 **③友達と一緒に野球ができた時、ジム少年は、どんなことを考えたと思いますか。** ・うれしい。・今まで頑張ったかいがあった。 ・どんどん活躍したい。	・資料の与え方を場面ごとに区切り、その都度、発問する。 ・次の話の展開に引きつけるようにする。 ・②で、主人公の苦しみに共感させる。 ・技の実演を通してその技の難しさを伝える。 ・努力した結果、すばらしい活躍をした様子を映像で見せ、実感させる。
（後段）	3．今の自分のことを見つめ、未来に向けての夢や希望を考える。	○今の自分はどんなことで頑張っていますか。 ・好きなことや得意なこと。 ・ピアノやスイミングなど習い事。 ○今日の授業で思ったことや感じたことをワークシートに書きましょう。	・自分や友だちの頑張りをそれぞれ再発見させ、自分たちのよさに気付かせる。 ・自分の夢焼き棒を
終末	4．教師の説話を聞く	○ジム・アボット投手の言葉を聞きましょう。 「人生は、挑戦あるのみ。」	・励まし、元気の出る言葉を伝える。

(5)　考　察

・映像資料、写真を提示したことで、児童に現実感をもたせることができた。

・場面絵を提示したことで、子どもが、状況、話の展開を想像しやすくなった。

・アボットが苦労する場面や心情を具体的に子どもに想像させるとよかった。

・主体的な価値の自覚を深めるための発問や書かせるときの指示を焦点化するとよかった。

Ⅲ　体験をともに生きていることを自覚できる指導の工夫（第３分科会）

１　分科会テーマ設定の理由

近年の子どもは、少子化や核家族化により身近な人の生死に直面する機会が少ないと言われている。本分科会によるアンケートの結果から、自他の生命を大切にしようと思ったことがない児童が思いのほか多いことが分かった。また、生命の大切さを教師の話やテレビなどから知識として持っている児童が多く、自分の誕生や生育の過程を学習しているが心に残っていないという傾向があることも明らかになった。さらに、自分自身で目当てを決めることが不得手な児童も多いため、自己実現や自分の存在にかかわる喜びが少なくなっているということもうかがえた。

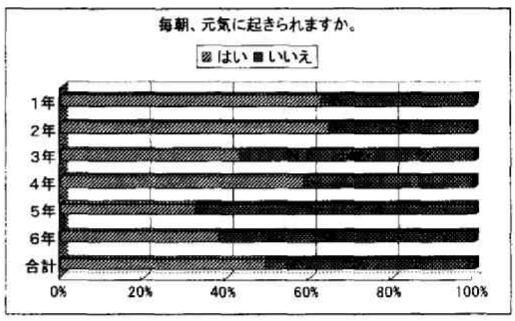
そこで、学校においては、生きている実感を味わえる体験をしたり、生きがいについて語り合ったり、感動や驚きをよびさましたりすることが、必要であると考えた。また、児童が生命を様々な角度（生命は限るあるもの・あらゆることやたくさんの人に支えられているもの・太古から未来へ連続しているもの・たくさんの偶然が重なり合った神秘的なものなど）から、とらえられるようにすることで、自他の生き方や生命を大切にして生きていこうとする児童を育てることができるのではないかと考える。体験をもとに生きていることのすばらしさを自覚すれば、自分を好きになることができ、他の生命や生き方をも受け入れられるようになる。さらに、夢や希望をもって自らの人生を切り拓き、新しい社会を切り拓く力も育つと考えられる。

第３分科会では、道徳部会の全体主題「未来を拓く道徳授業の創造」を受け、子どもたちが道徳性の基盤となる生命のすばらしさを味わう力を体得することや、生命を尊重する心情を育てていくことを主眼に分科会テーマを設定した。そして、力強く生き抜くための道徳的実践力を身に付けていくことができるような道徳授業を研究開発をしていくものである。

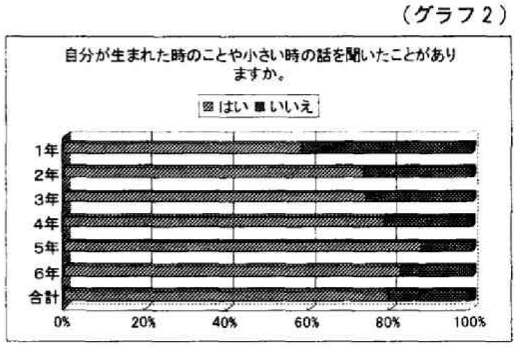
２　児童の実態・分析と考察

都内区立小学校５校　全学年　968名　質問紙法で事前調査を実施した。

（グラフ１）



（グラフ２）



日頃のあたりまえのことに、生きている実感がみいだせるか（グラフ１）

毎朝、やる気をもって前向きに生活を始めることは、様々な体験を受け止める上での基盤となる。しかし、児童の半数近くが元気に起きられず、高学年になるにつれて、その割合が増えている。理由は「夜更かし」と答えている児童が多い。

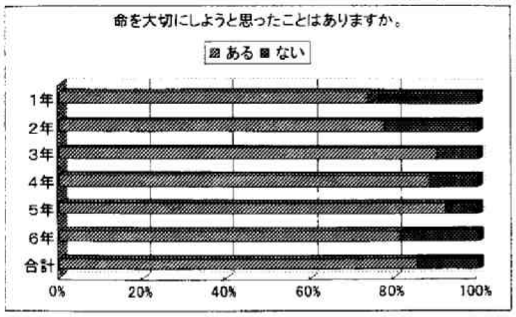
覚醒していないと身体・感情面での反応は鈍くなり、せっかくの体験もその後の活力につながらない。日頃の当たり前のことにまず、目を向けさせる必要がある。

自分の誕生や生育の過程についての実感があるか（グラフ２）

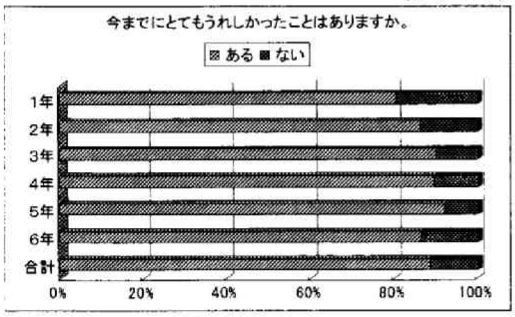
２年生の生活科で「自分の生活史」について学習しているが、聞いたことがあるかの問いに「ない」と答えている児童が意外に多い。「はい」と答えている児童には、生まれるときの周囲の大変さと自身の生命の尊重にまでふれて回答しているものが見られる。うれしく聞いていることが分かった。

上記のような体験を学校で多く設定する必要がある。

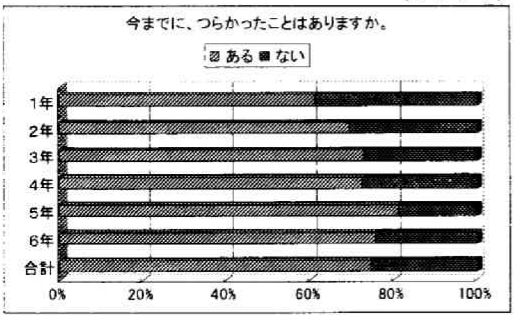
（グラフ３）



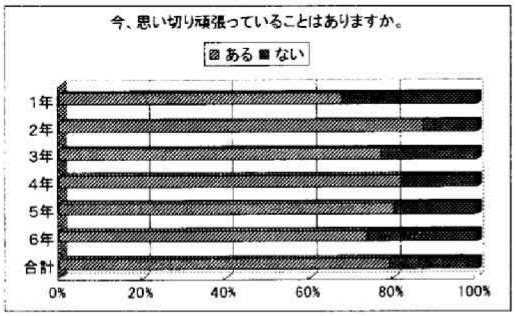
（グラフ４）



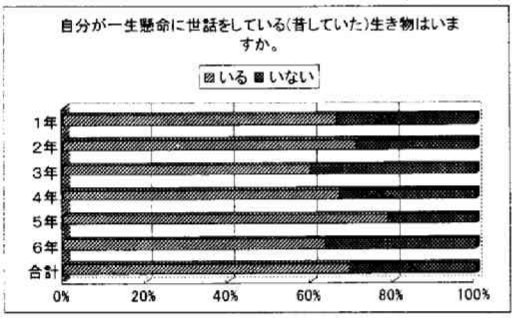
（グラフ５）



（グラフ６）



（グラフ７）



かけがえのない生命の実感があるか（グラフ３）

自分自身を大切にしようとする気持ちはだれにでもある。しかし、自分の生命の尊さに実感が薄い児童が約１割いる。生命を大切にしようと思ったことが「ある」児童はテレビや先生の話などから、生命の大切さを再確認している。

学校の様々な場面において、生命について繰り返し振り返らせることで、より生命についての実感が得られるものと考える。

生きている実感はどんな体験に基づいているか（グラフ４、５）

調査全体をとおして物をもらったり自分の欲求が満足できたときに「ある」と答えている児童が多い。高学年になるにつれて、自己実現・努力の成果を見たときに「ある」と答える割合が多くなっている。家族と共にいることや友達と仲良くいること、共に同じことに幸福感を感じているときに「ある」と答えている児童も少なからずいる。他の人の幸せをみて「ある」と答える児童は少ない。「うれしさ」に対して「つらさ」を感じている児童が少ない。

友達との人間関係において「つらい」と考えている児童が高学年になるにつれ多くなっている。

体験を思い起こし、実感できる時間をこれまで以上に持たせる必要がある。

力強く生きぬこうとする心がみられるか（グラフ６）

自分自身で決めためあてをもって頑張っている児童は少ない。スポーツクラブ等に通っていること自体「頑張っている」と答えている児童が多い。日常のことに目当てを持って行動している児童は少ない。

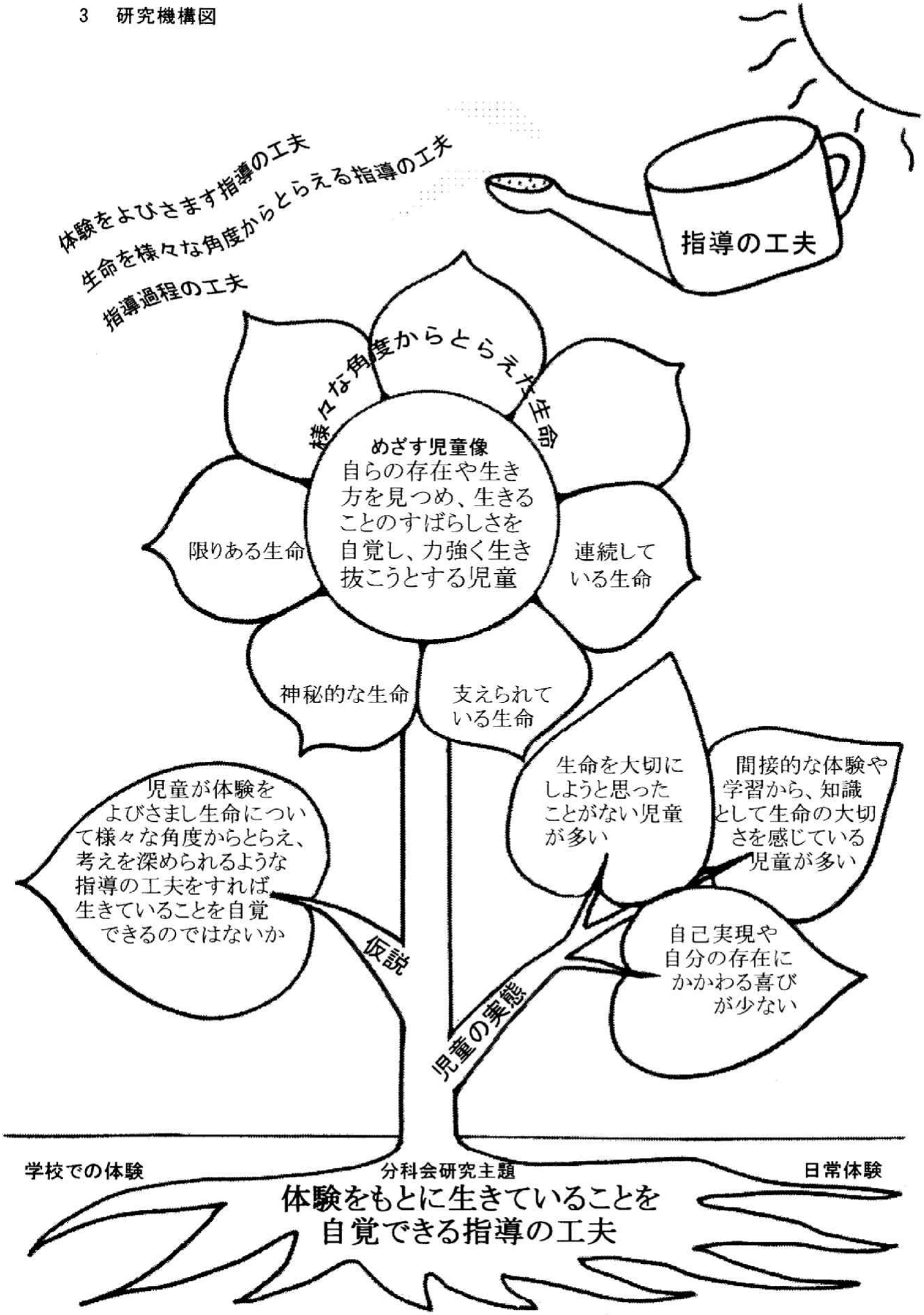
「ない」と答えている児童が20％もいることは、積極的に生きるために自分で決めた目当てを持たせる大切さを物語っている。

生命によりそって生きる体験があるか（グラフ７）

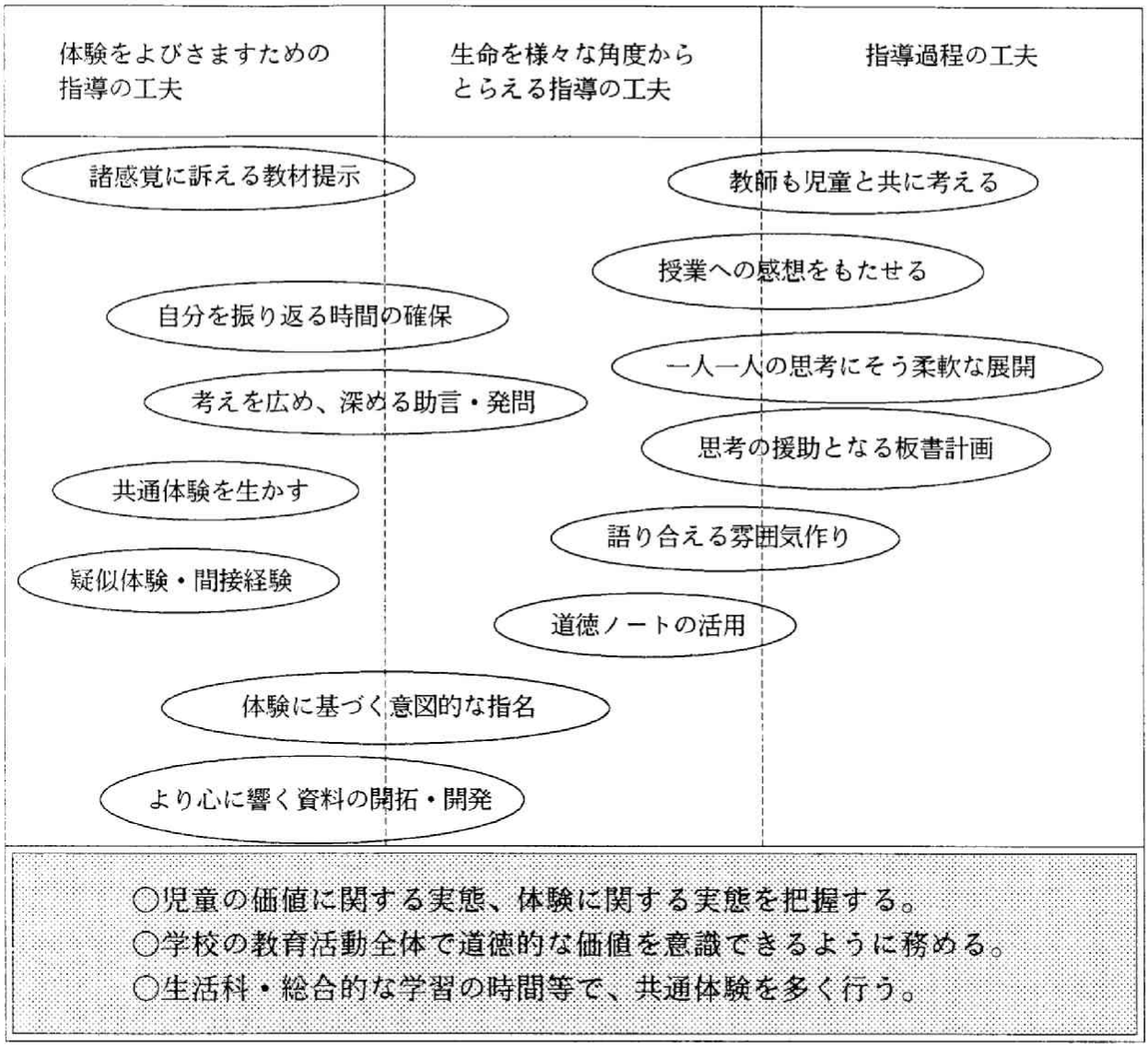
低学年の場合、実際に自分が一人で世話をしているとは、考えにくい。学年があがるにつれ、自分一人で世話をすることの難しさが分かり、体験があっても一生懸命とは思っていない。「もしも、その生き物とお別れしなくてはならなくなったら、何と言葉をかけますか。」という質問に「ありがとう。」など心を通わせていたことが分かる一言がある児童は少ない。「じゃあね。」「さようなら。」が多い。生き物の世話をしたことがないと答える児童が25％いる。

生き物との精神的に寄り添っていないことが分かる。身近に生き物がいる生活を、学校でも設定する必要がある。

3　研究機構図


体験をよびさます指導の工夫
生命を様々な角度からとらえる指導の工夫
指導過程の工夫
指導の工夫
様々な角度からとらえた生命
めざす児童像
自らの存在や生き方を見つめ、生きることのすばらしさを自覚し、力強く生き抜こうとする児童
限りある生命
連続している生命
神秘的な生命
支えられている生命
児童が体験をよびさまし生命について様々な角度からとらえ、考えを深められるような指導の工夫をすれば、生きていることを自覚できるのではないか
仮説
生命を大切にしようと思ったことがない児童が多い
間接的な体験や学習から、知識として生命の大切さを感じている児童が多い
自己実現や自分の存在にかかわる喜びが少ない
児童の実態
学校での体験
分科会研究主題
日常体験
体験をもとに生きていることを
自覚できる指導の工夫

4　指導の工夫



5　実践事例（第２学年）

(1)　主題名　命を育てる心

　　資料名　ベランダのはと　（自作）

(2)　ねらい　毎日の生活に喜びを感じ取り、自他の生命を大切にしようとする気持ちを育てる。

(3)　指導の工夫

- 体験を生かす
  - ・事前アンケートを意図的指名に生かす
  - ・模擬体験・間接経験
  - ・自分を振り返る時間の確保
- 様々な角度からとらえる
  - ・自作資料
  - ・腹話術人形の助言
  - ・授業への感想をもたせる
- 指導過程の工夫
  - ・教師と共に価値を自覚する

(4) 展　開

	主な発問と予想される児童の反応	教師の支援
導入	1．ひなのいるハトの巣を見て、資料への導入と今日の主題を知る。 ○生き物を飼ったことのある人は、どんなかかわり合いがありましたか。	● 模造したハトの巣を見せ、児童のつぶやきをとらえながら、経験が語れるよう援助し、ねらいへ方向付けられるようにする。
展開	2．資料を読み、話し合う ① お父さんとお母さんは、ベランダに来るハトのことをどう思っていますか。 ・うるさくて困るなあ。 ・フンで汚れて臭くて迷惑だなあ。 ② どうして「しずかにみててあげましょう。」と思ったのでしょう。 ・小さな命を大切にしたい。 ・親が頑張って世話をして育てているから。 ③ 二羽のひなに言葉をかけてあげましょう。 ・かわいいね。おおきくなってね。 ④ 空っぽの巣を見て、どんなことを話し合ったでしょうか。 ・毎日楽しく過ごしているかな。 ・親にあまり面倒をかけずにやっているかな。	● 内容をイメージしやすくするためにパネルシアター風に提示する。 ● 迷惑でも生き物の小さな命を大切にしようとするやさしい気持ちに触れるようにする。 ● 場面の家族の一人として自分の生活とつなげながら、考えるよう助言する。 ● ワークシートに吹き出しを作り、自分も登場人物の立場で考えられるようにする。
	3．今までに生命を大切にしてよかったと思ったことはありますか。また、大切にできなかったことはありますか。その時の気持ちも思い出してみましょう。	● 発言内容のポイントを黒板に整理し、考えを広めたり深めたりできるようにする。 ● 腹話術人形のジョー君の語りを通して、学校での出来事に気づくよう助言する。
終末	4．自己評価を記入する。 5．元気に歌を歌う。	● 今日の学習への取り組みを振り返り、感想をもてるようにする。

(5) 考　察

・身近な話題の資料とその提示を視覚に訴えたことで、より有効に活用できた。
・動作化（疑似体験）したことで、児童の資料の内容を身近なものとすることができ、児童の体験を想起させるきっかけとすることができた。
・事前調査をもとに意図的な指名を行ったことで、児童の考えを広げることができた。
・板書を図式的にまとめたことで、児童の発言が活発になり、様々な考えを引き出すことができた。
・腹話術人形に投影された教師の価値の自覚が児童の価値の内面的自覚を深めることを助けることができた。

Ⅳ　互いのよさや違いを認め、進んで人とかかわる心を育てる指導の工夫（第４分科会）

１　分科会テーマ設定

現在の日本の子育ての問題を考えるとき、子どもたちの多くは、学校から帰宅後の塾に明け暮れ、残りの時間といえばテレビを見たりゲームに熱中したりしている。最近では少年犯罪も増加し、原因のなかに、人とのコミニケーションがとれず、我慢するという経験が少ないためちっとしたことで、いわゆるキレるという傾向がみられる。人とのかかわりの場が少なく自己中心的な大人が増え、それを見て育った子どもに様々な影響を及ぼしている。学級において子どもたちが見つめてみると、人とかかわらなくとも平気でいる子、人とかかわることを面倒がる子、集団の中で自分を表現できない子もいるのが現実である。

人間は、かかわりの中で生活している。望ましい人間関係を形成していくためには、自己の行動に責任をもつとともに、相手の立場や考え方を認め、尊重していく態度が大切である。つまり、他人のよさや違いを認め理解することができれば自己の向上につなげていくことができる。また、そうすることによって、人間を愛する心や人間尊重の精神が育成されると考える。

実態調査からも、友だちの意見に感心したり学んだりしている児童は多くいるのだが、自分の考えが友達に多く受け入れられていることや認められていることが、認識されていないということがわかった。そこで、一人一人の児童の実態を把握するとともに、よりよい人間関係をつくる場が必要であると同じに、道徳の時間の授業で、道徳的価値の内面的自覚を深めるためには感動したり、楽しんだり、話し合ったりできる学級づくりが大切であると考えた。

また、人間関係づくりのきっかけとして、計画的にエンカウンターや体験的活動を取り入れながら、道徳の時間の中で互いのよさや違いを認め合える工夫を積極的にすることによって、人とのかかわりがすすんでできる児童になるであろうと考えた。つまり、互いの人格を理解し、尊重し、認め合い、助け合い、協力しながら、自他と共に高まっていこうとする心を育てていこうと考えたのである。

以上のことをふまえ、分科会の主題を「互いのよさや違いを認め、進んで人とかかわる心を育てる指導の工夫」と設定した。

２　実態調査・分析　　調査日：平成12年７月

(1)　調査目的　：友達や他の人との「かかわりの経験」や「かかわることに対する考え」の実態をつかむ。

(2)　方法　　：都内６校の第３学年81名、５学年87名、６学年108名の合計276名に行った。選択肢による質問紙法。

(3) 結果と考察

設問1　あなたの経験したことや体験したことに質問します。

	何度もある	わりとある	1回ぐらいある	全くない
1．友達に自分から挨拶をしている	44.8%	36.2%	12.4%	6.5%
2．登下校中に知り合いにあったら挨拶をする	40.6	34.7	18.8	5.9
3．高齢者に親切にしてあげたことがある	21.4	34.8	35.9	8.0
4．小さい子供の世話をしたり、遊んだことがある	60.6	24.2	9.4	5.9
5．親戚家族以外の人と泊まったことがある	39.1	31.0	16.6	13.3
6．休み時間に友達を誘って遊んだことがある	57.9	28.0	9.8	4.2
7．けんかを止めたり、注意したりしたことがある	13.8	36.6	36.6	13.0
8．友達を泣かせてしまったことがある	12.2	25.2	44.1	18.5
9．とっくみあいのけんかをしたことがある	15.5	18.5	26.6	39.2
10．友達の考えや意見の発表に感心したことがある	40.0	42.1	17.2	0.7
11．休み時間に友達から誘われて遊んだことがある	62.0	31.2	5.2	1.5
12．学校から帰ってから友達と遊んだことがある	85.7	12.8	0.8	0.3
13．家の人に友達と比べられたことがある	25.7	26.8	24.6	22.8
14．友達と自分を比べてしまったことがある	21.3	30.1	31.6	16.9

〈結果と考察〉

調査から、人とかかわることの中心は友達であるが、おおむね好ましい実態であることが分かる。

しかし、積極的かという点では、友達を誘って遊ぶより、誘われて遊ぶことが多いこと、けんかをやめさせるなどの経験が少ないことなどが分かる。したがって、受動的なかかわり方をする子が多いと考えられる。

設問2　あなたがいつも思っていること考えていることについて質問します。

	何度もある	わりとある	1回ぐらいある	全くない
1．学校は楽しい	43.3%	33.3%	21.5%	1.8%
2．友達はたくさんいる	49.8	30.9	15.9	3.3
3．自分の考えに友達が賛成してくれることが多い	16.3	38.0	37.2	8.2
4．友達ともっと遊びたいと思う	61.0	19.9	12.4	6.7
5．暑い日や寒い日は友達と遊びたくない	7.8	8.6	31.2	51.7
6．もっといろいろな友達と遊びたい	37.5	31.2	23.4	7.8
7．1人で好きなことをしていたい	15.6	13.4	48.0	23.0
8．1人で勉強する方が集中できる	24.9	23.8	31.6	19.7
9．グループで勉強するほうがわかりやすい	27.3	33.7	28.0	10.8
10．みんなに向けて発表する学習は楽しい	14.2	23.6	43.4	18.7
11．みんなで意見を発表し合う授業は楽しい	21.0	23.8	42.6	12.5
12．大勢で遊ぶより1人で遊ぶ方が気楽でいい	6.0	6.4	28.9	58.6
13．周囲の人に好かれていると思う	8.2	16.0	37.7	38.0
14．自分の意見は友達に否定されることが多いと思う	10.4	18.2	48.7	22.7
15．これから友達がどんどん増えていくと思う	33.3	31.2	26.4	8.9

多くの児童はもっと友達と遊びたいと思っている。また、1人よりも多くのかかわりを求めていることが分かる。

しかし、グループ学習において意見や発表し合う学習には抵抗を示す傾向がみられる。友達の意見に関心することはあっても自分の考えが受け入れられない児童は発表し合う授業は楽しくないことが分かる。

(4) 全体を通して

児童自身意識の中で自分の周りの人とのかかわりを求めているが、行動面においては、誘われれば行動するといったことが多く、受動的な傾向がみられる。この調査結果から、21世紀を担う子どもたちを育てるには、特に授業中などの時間に、お互いのよさや違いを認め合うことを意識して取り上げ、人前で話したり発表したりできるよう自信をもたせることが大切だと分かった。

そこで第4分科会では、互いのよさや違いを認め、すすんで人とかかわる心を育てる指導の工夫をしていくことが必要であると考えた。

3　研究構想図・指導の工夫

児童の実態：友達の意見に感心したり、学んだりしている児童は多くいるが、自分の考えが友達に受け入れられたり、認められたりしているという認識をもっている児童は少ない。

（分科会主題）
互いのよさや違いを認め、進んで人とかかわる心を育てる指導の工夫

（目指す児童像）
互いのよさや違いを認め合う子ども　↓
↑　すすんでかかわろうとする子ども

（仮　説）
互いのよさや違いを認め合える指導を工夫すれば、より積極的に人とかかわることができる。

①よさや違いを互いに認め合うことで共に向上できることを実感できれば、他の人を肯定的にとらえることができる。
②①を繰り返していけば、人とのかかわりが楽しくなり、よりすすんで人とかかわっていくことができる。

（指導の工夫）

事前	⇐心を揺さぶる⇒	心に響く道徳授業	⇐心を揺さぶる⇒	事後
道徳性をはぐくむ体験		**共に考え、悩み、感動を共有しながら道徳的価値の自覚を深める**		**道徳の時間の多様な活動**
・児童の実態に即して必要と思われる体験活動を計画する。 ・自分を見つめる活動を取り入れ、自己肯定を促す。 ・グループエンカウンターによる他者理解の活動を取り入れる	→	・多様な考え方のできる資料の精選 ・発達段階に合わせたねらいの焦点化。 ・多様な意見、互いのよさや違いを引き出させる発問の工夫。 ・自他の考えを深められる話し合い。 ・ワークシートの活用と工夫。 ・互いの向上の振り返り。	→	・他教科領域での実践力の向上。 ・学校生活での実践力の向上

4　実践事例（第５学年）

(1)　主題名　「認め合う心」

(2)　ねらいと資料

ねらい「一人一人のちがいを肯定的に捉え、認めようとする心情を育てる。」

資　料「すばらしい人とは、どういう人のこと？（発問）」

(3)　展開

	学 習 活 動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1．自分らしさや友達のよさについて考えた学習を振り返り、一人一人に違ったよさがあることを再認識する。	自分のよさを１つ、黒板に書けましたね。 **本授業では、予め板書しておく。（友達紹介との時間の関係）** 一人一人によさがあり、その人らしさがありましたね。５年２組には36人分のいろいろなよさがありました。 友達紹介をしてください。 **本授業では、二人組で参観者のところに行き、友達を紹介する。**	・自分らしさやよさが書かれたものを手元に置かせる。 ・全員が隣の友だちを紹介する。
展開	2．自分らしさや友達のよさの違いから人の価値について考える。 3．それぞれの考えるすばらしい人について、意見を交換し、話し合う。	自分らしさや友達のよさを見つけられる君たちに挑戦して欲しいことがあります。 すばらしい人とは、どういう人のことですか。考えてください。 ・え～。そんなのむずかしいよ。 ・すばらしさってどういうこと？ 自分で考えたものをもとにして、班で話し合いをします。クラス全体に紹介したい「すばらしい人とは、こういう人だ」というのを一つ決めて下さい。	・ワークシートＩに記入させる。 ・各班をＴＴで対応しながら話し合いを活発にさせていく。

		・優しい人だと思う。 ・何でもできる人じゃないかしら。	
	4．各班の発表を聞き、気づかなかった考え方を学び、自分なりにもう一度考える。	話し合いの結果を発表してください。 発表を聞きながら、考えてみてください。	・板書する。
終末	5．友達のよい意見を認め合い、感想をまとめる。 6．教師の話を聞く。	今日は、すばらしい人ということについてみんなで考えていきました。最後に、今日の学習で思ったことや学んだことを書いてください。 そして、学習の中で○○君のこんな意見が良かったなど、感心したことも書いて下さい。	・ワークシートⅡに記入させる。

(4) 評価

・自分なりに考えてもてたか。
・話し合いに、意欲的に参加できたか。
・一人一人の違いを肯定的に捉え、認めようとする気持ちをもてたか。

(5) 考察

・「多様な価値観を引き出すための発問」という形の資料は有効であった。
・展開の中で小グループの話し合いを取り入れたことで、意見の交換が活発になった。
・「ふりかえりカード」を使用することは、一人一人のよさや違いを認めるうえで有効であった。
・授業の中での一人一人の変容を知るための手がかりをＴ・Ｔという形で行なったが、さらに効果的な工夫を考えていきたい。

◇研究の成果と今後の課題

研究主題「未来を拓く道徳授業の創造」を目指して、分科会ごとに具体的な授業実践を通して研究を進めてきた。その結果、各分科会ごとに次の点が明らかになった。

1　研究の成果

○第１分科会

・「集団や社会の中での体験」を全教育活動の中において捉え直し、表しとて整理したことによって、体験との関連を今まで以上に意識し、生かした授業設計が可能となった。

・実態調査を踏まえた資料活用や発問の工夫を行うと、子どもの発言に含まれた深い思いを理解し、授業展開に反映させていくことができることを実感することができた。

○第２分科会

・心を揺さぶられるような資料に出合わせると、道徳的価値の内面的自覚がより深められることが分かった。

・現実感のある資料を提示することで興味・関心が高まり、児童が積極的に自己を見つめ直し、実践意欲の高揚につながりやすいことが分かった。

○第３分科会

・生命を様々な角度からとらえられる資料を提示し、指導を展開することで、児童がより自分のこととして道徳的価値をとらえられるようになった。

・教師の体験を語り、教師と共に児童が道徳的価値の内面的自覚を深めていくことで、道徳の時間を心待ちにするようになった。

○第４分科会

・多様な考えを引き出すための「すばらしい人とはどういうことか」という発問は、その子らしさを引き出すことができ有効であった。

・展開の中での小グループの話し合いを取り入れたことは、意見の交換が活発となった。

・振り返りカードを使用することにより、子どもたちは一人一人のよさや違いを認めることができた。

2　今後の課題

○第１分科会

・子どもたちの「自他の考えを尊重した話し合い活動」には、教師の深い児童理解が必要となる。教師としてさらに共感的な児童理解ができるようにしていく必要性を感じた。

○第２分科会

・心を揺さぶられるような資料に出合うと、児童が道徳的価値へより主体的、積極的に向き合うようになるので、今後も資料となる素材を幅広く集めていきたい。

○第３分科会

・児童の体験を知ることや学校で生命に関わる共通体験・疑似体験の場の設定と道徳の時間との連携を計画的に行うようにする必要がある。

○第４分科会

・授業の中で一人一人の変容を知るための効果的な手立ての工夫を考えていきたい。